

21 嚥下障害患者の退院指導

- 在宅生活へのかかわりについて -

病院 看護部 5階病棟 山崎咲子 松根智美 八十濱成人

1. はじめに

脳血管障害により嚥下障害を伴うことが多い。嚥下障害患者が安全な摂食・嚥下の自己管理ができないと、退院後も自立した生活をおくれない問題が生じる。今回、内服薬の管理や経管栄養の手技が確立していないなどの問題があり、退院後の生活にも不安があった患者が看護師のかかわりにより安全な経管栄養法を獲得し、退院への自信につながった事例を振り返ることで、この嚥下障害患者の退院指導の看護のポイントを具体的に示したいと考え、まとめたので報告する。

2. 事例紹介

76歳の男性、大卒、元中学校の教師、現在無職、妻と長男家族の5人暮らし。平成16年2月左延髄梗塞発症、嚥下障害となる。前医にて主栄養は間欠的口腔食道経管栄養法（以下OE法）とゼリー摂取訓練を実施していた。特に嚥下障害の改善を目的に当院5階病棟に入院した。ADLは入浴動作以外は自立。糖尿病、高血圧、狭心症、喘息、緑内障の既往あり。

3. 看護の実際

1) 看護上の問題点

- ①OE法の手技が未熟のため一連の動作が自己実施できない。安全に経口摂取ができない。
- ②家族（妻）と患者は障害への理解が十分ではなく、在宅生活への認識に食い違いがある。

2) 看護目標

- ①在宅生活にむけてOE法と経口摂取の受け入れができ、手技が自立し安全に実施ができる。
- ②在宅生活の自立を目指し、障害や疾病に対して家族（妻）の理解と協力が得ることが出来る。

3) 具体策

- ①OE法の必要性を働きかけ、手技を意識づけるためにチェックリストを作成し実施する。経口摂取は毎日時間を決めて、咳払いの実行などの安全確保を看護師が見守りながら指導する。
- ②退院後の生活を具体化でき、自信をもたせるために、外泊訓練をすすめる。

4. 結果

- ①OE法の必要性が理解でき、手技リストを確認しながら施行する習慣が付き、安全に自己実施が可能となった。また1日1回お楽しみレベルの摂取（ごっくんゼリー）が可能となった。
- ②外泊することにより在宅生活の課題を確認でき、家族（妻）の協力も得られるようになった。

5. まとめ

本事例の退院指導のポイントは①OE法の手技を確実に習得をすること。限られた形態（ゼリー状）を安全に摂取できること。②在宅での実際を経験することによって自信をもたせること。③家族（妻）に対しても障害や対応方法の情報を提供することであった。本事例は経管栄養の離脱はできなくお楽しみレベルの摂食だったが、経管栄養と摂食をどのように行うのか、なぜそうするのかを繰り返し十分説明し、さらに家族の協力をもたせるように指導したことが有効であった。